

井戸端だより

第89号

発行日：2015年3月26日

発行：くらしの学習会

もくじ

1月例会報告・会計報告	1
2月・3月例会報告	3
戦時下の姉たち	7
戦争と五人の兄たち	9
息子の結婚	11
京のまち歩き	13
脳梗塞にびっくり	15
さあ、旅に出かけましょう	カレンダー 17
短歌五首	18
雑感	19
編集後記 お知らせ	23

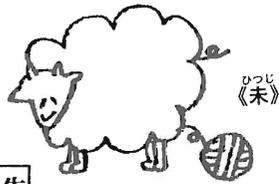
3月21日お彼岸の中日、新居浜・西条方面へお墓参りに行った。
家族の健康のお礼と平穏をお祈りした。

道中、鮮やかな黄色い菜の花が真っ盛り。桜三里の桜はまだ蕾。開花宣言そして一週間もすれば満開に。自然はその折々、確実に役割を果しながら、人間の気持ちをも和らげてくれる。

もう何年も我が家で羽化しているジャコウアゲハの蛹が、今年も庭の所どころで暖かくなるのを待っている。

胸騒ぐ昨今の世界の情勢、何かが狂ってしまった。争いの歴史は繰り返す。平凡な市民は粛々と日常生活を送って行くしかないのだろうか。

「井戸端だより」89号をお届けします。読んで下されば幸いです。



1月例会報告

1月例会は新年会も兼ね、12月例会で訪れた『道後夢蔵』に会員6名で再度出かけた。12月の御膳が和の料理の中にちょっぴりクリスマスを感じさせる盛り付けで私たちの目を楽しませてくれたので、1月の料理の盛り付けを楽しみに門をくぐった。今回は一番奥の部屋へ通された。(前回が一番手前の二間続きの部屋) その部屋の窓からは、道後温泉を発見したといわれる羽を広げた白鷺の像が屋根の上であり赤いギヤマン細工の窓が美しい『振鷺閣』を真っ正面に見事な姿を見ることができた。

食事の前に、2014年度会計報告・会員名簿の確認を済ませ、今年度の活動計画は食事をしながら話し合うこととした。

<本日の献立>前菜は6種盛り合わせプレートと小鉢二皿・蒸し物・煮物・お造り・釜飯(汁物・香の物)デザート・コーヒーと盛り沢山。新年の祝賀をイメージし、水引き・紅白梅や雪の結晶の細工野菜を飾り付け、タイとブリをメインに野菜もタッパリ添えられ体にやさしい料理を、贅沢な器を楽しみながらゆったりと味わうことができた。しかしながら、ここでの食事は今回で最後となってしまふ。参加した皆がとても気に入り何度も訪れたいと思える食事処だったのでとても残念である(1月14日をもって一般客向けのランチ・ディナーを中止、宿泊者のみの食事提供になる)出てきた料理について主婦目線でのお喋り、それぞれの最近の出来事や考えていること等賑やかな時間を過ごした。活動計画としては、大洲の少彦名神社の見学・水力発電所の見学など、例年のごとく自由に決めていくことになった。戦後70年を迎える今年、まずは2月に「戦前戦後を人々がどう生きたのか」を中心に、身近な家族や終戦を経験した会員の記憶にある話などを聞き、それぞれの思いを話し合うことになった。

新年会もお開きとなり、3人は帰路に就き、3人は道後温泉周辺を散歩することに。中予に住んでいると遠来の客でもない道後方面へ足が向くことが少ない特別な場所、たまには観光客気分でも漫ろ歩くのもいいものである。それにしても平日の午後にも拘らず、観光を楽しんでいる人の姿の多さに驚

く。2015/2/7愛媛新聞によると、道後温泉本館改築 120周年記念芸術祭「道後オンセナート2014」開催で芸術祭効果により切れ目なく人を呼び込むことができ、会期中には旅行予約サイト「おんな一人旅に人気の温泉地ランキング」で1位に選ばれるなど新しい顧客層を開拓でき、3年連続宿泊客の増加となったそうだ。今後、訪れてくれた観光客のリピーター確保が重要な課題となる。近年、地方や市街地などの「まち」を舞台にしたアートプロジェクトが全国的に増加、アートを絡めたまちづくりを模索する動きが広がっている（2015/2/8愛媛新聞より）私たちのような中予エリア在住の人達が「道後でおもしろいイベントをやっているよ」といった感じで地元民が頻りに訪れるような文化発信の展開が広がれば『道後』が特別な場所ではなくなるのではないだろうか。ちなみに情報番組やフリーペーパーなどでホテルでのチョット贅沢ランチやランチビュッフェの特集があったり、道後周辺にある足湯をめぐる道後あるきの提案など様々な情報発信がされている。短時間ではあったが道後商店街を回り、道後観光案内所に立ち寄り道後村のレトロなイラストで描かれた地図を頂き今回の道後歩きを楽しみに帰路に就いた。

(A. M)

会計報告(2014.1~2014.12)

収入	前年度繰越金	102699
	活動会費8名分	16000
	購読会費19名	19000
	カンパ3名	9000
	利子	13
		146712
支出	用紙代通常	4990
	切手代	13451
	料理材料費パエリア	1180
	遠出	
	ガソリン代	6120
	高速料金	8720
	駐車料金	600
		35061
差引	146712-35061=110651	次年度繰越金

2月例会報告

2月4日水曜日は例会を林宅で行いました。

今回は第二次世界戦争体験を聞くと題して集まりました。

出席者は6名でした。みなさんが持ち寄ってくださったお菓子の数々、素晴らしかったです。

まず、林の母親の名古屋での体験（自分の母校で毎年1回行っている講義のレジユメ）を読みました。本人が体験した戦時中の生活、その当時の情勢、名古屋大空襲の体験、アンネの日記のアンネと同一年の自分の体験を対比させた記述などからなっています。

Mさんの子供のころの体験談、Kさんのお姉さんたちの記録集の写真（防災訓練風景）なども見せていただきました。

戦争終結の証書、憲法前文、9条を読むなど戦争は二度と起こしてはならないと強く思いました。

そのあと、お昼は志津川の「ぜんまい」でいただきました。（T・H）

3月例会報告

3月3日火曜日は例会で、大洲少彦名神社参籠殿の補修工事完成の様子を見に遠出しました。出席者は4名。あいにくの雨でしたが、朝9時に中央公民館駐車場を出発し、順調に目的地までたどり着きました。

掛けづくりの参籠殿は7日がお披露目ということで、建物はすでに完成、周囲の整備工事を急ぎ行っている様子でした。外から建物内も見ましたが、中にはお酒なども運ばれていました。

アメリカの財団から1,800万円の寄付を受けての工事だったと新聞に載っていましたが、こんなところまで寄付の手を差し伸べてくれるアメリカの財団には本当に感謝です。

少し離れた同じ名前の神社にもまわりました。ナビがなかったらおそらく行けなかったと思います。

そのあと、中山の花の森ホテルのレストランで昼食をとりました。素晴らしい景色の中で、霧が立ち込め、水墨画の中にいるような感じでした。のんびりゆっくりお食事と会話を楽しみました。（T・H）

3月例会報告

1月例会で話に出た、米国の非営利団体「ワールド・モニュメント財団」(WMF)が2014年版「危機遺産」に選定された参籠殿(さんろうでん)の修復が進む大洲市菅田町大竹の少彦名神社を訪れた。活動会員4名でAM9時、中央公民館を出発。雨を心配しながら高速で大洲市へ。ナビの案内で現地到着。雨がポツポツ降り始める。車から降りると宙にせり出したように見せる懸け造り(京都の清水寺のように山の斜面に木を組み建物をせり出させた造り)の参籠殿が目の前に。

※修復実行委員によると、修復は全額寄付でまかない全国の約250人から約1900万円を集め、外周部の柱を13本取換え、破れた床も修理し屋根瓦のふき替えや壁の上塗りも終え11月にはほぼ9割方終わっていたが、その後WMFを介して米国バーモント州のフリーマン財団の協力で約1900万円の助成が決定し、資金繰りに苦労していた事業のめどがたち、周辺の山道やトイレの整備を行う予定で2015年3月7日落成式を行う。愛媛新聞10/16.12/22より※

ぬかるんだ坂道を恐る恐る上がり参籠殿正面へ。1934(昭和9)年に完成した延べ床面積128㎡の木造平屋建築。道後温泉の正面にある様な美しい曲線を象った屋根があり境内の建物らしい趣がある。そこには修復中に事故で亡くなった前大工棟梁中野安則さんを悼むモニュメントが設置されている。※参籠殿を左手に見ながら石段を上っていくと拝殿(足場が組まれ修繕中のようだった)が見えてくる。参拝者のほとんどがこの拝殿を本殿と勘違いして帰ることが多いが、この拝殿の左から中殿(神楽殿)本殿(御陵)に続く細い山道があるのだが、一部に谷川を渡ったり藪をかき分ける場所もあるので山道に入るのは避けた方がよいそうだ。(Traveljpたびねすより)※

私達もここでお参りをし次の目的地、大洲市菅田町菅田にある少彦名神社へ。えっ又、と思われるかも知れませんが、すぐ近くに少彦名命が滞在したと伝えられる同名の神社がある。車移動だと大回りしないとたどり着けないが歩きだとすぐ近くといった感じなのだろう。木々に囲まれた質素な拝殿がひっそりとあり、境内は地域の人達の憩いの場として利用されているらしく

きちんと管理されている。せっかくのチャンスだったので両方参ることができて良かったと思う。

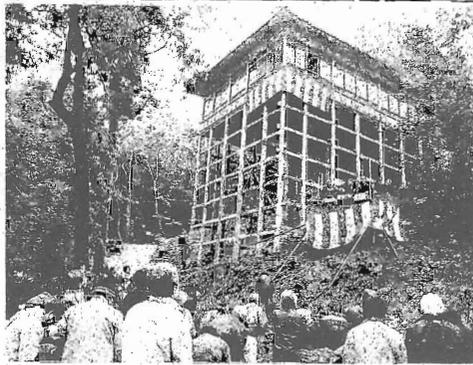
※スクナビコナ（出典：フリー百科事典『ウィキペディア』より抜粋）

日本神話における神。『古事記』では、カミムスビノカミの子とされ『日本書紀』ではタカミムスビノカミの子とされる。『古事記』によれば、大國主の国土造成に際し、波の彼方より天乃羅摩船（アメノカガミノフネ）（＝ガガイモの実を2つに割った小さな船＝ガガイモ科ガガイモ属のつる性多年草。九州以北のほか東アジア一帯に分布し、民間伝承上の謎の生物ケサランパサランの正体はガガイモの種だという説がある）に乗って来訪し、オホナムチ大神の命によって国造りに参加した。オホナムチ同様多くの山や丘の造物者であり、命名神である。悪童的な性格を有するとも記述されている（『日本書紀』八段一書六）。後に常世国へと渡り去る。国作りの協力神、常世の神、医薬・温泉・まじない・穀物・酒造・石の神など多様な性質を持つ。※

※伊予風土記にもスクナヒコナとオオクニヌシの道後温泉瓊見のエピソードがある。神話の時代、オオクニヌシノミコトと共に伊予國にやって来たスクナヒコノミコトが重病となった時、苦しむスクナヒコノミコトをオオクニヌシノミコトが掌にのせて湯に浸すと平癒した。その際、スクナヒコナノミコトが喜びの舞を舞ったのが「玉の石」の上だった。その二神を祀っているのが道後温泉本館南側の冠山山頂にある「湯神社」である。（愛媛新聞社発行アクリートより）※

二か所の少彦名神社を巡り、雨足も強くなってきたので産直市「愛たい菜」で小休止。せっかくなので大洲の美味しい野菜を購入。その後、昼食を予定している「花の療ホテル」へ。ランチを食べながら4月の例会について話し合う。久万高原町の柳谷水力発電所の見学を決め、連絡を取るようになった。見学が無理だったら東温市内の桜巡りをする事になった。3月3日雛祭りのこの日、Hさんの息子さんのお祝いの話に皆の心が暖かく幸せな気持ちに包まれゆったりとした時間を過ごし、雨の中、帰路に就いた。 (A.M)

少彦名神社参籠殿の修復工事の落成式で行われたもちまき(7日午後、大洲市菅田町大竹)



米財団選定の「危機遺産」

参籠殿の修復完了

洲社 大少彦名神社

懸け造りで知られ米国の財団が「危機遺産」に選んだ大洲市菅田町大竹の少彦名(すくなひこな)神社参籠殿(さんろうでん)の修復作業が終わり、7日に落成式があった。

有志の修復実行委員会が14年から本格的に修復工事を開始。長さ十数メートルに及ぶ外周部の柱を取り換え、破れた床を修理。屋根瓦も全部取り替えた。国内延べ309人の寄付金2145万円とWMFの助成金16万5千円(約1900万円)で賄った。

落成式には関係者や寄付者ら約140人が出席。修復実行委の清水英範委員長が皆さんの温かいご協力で修復できたこと謝辞を述べ、WMFのヘンリー・エンジ

↓副理事長らに感謝状を贈った関係者(上)によるシンポジウムもあった。修復作業中に起きた前大工棟梁(ごうりょう)の中野安則さんの事故死や資金難を乗り越えて迎えた晴れの日に、叶副委員長は皆がボラれたのは奇跡と感無量だった。

寄付・助成金のうち、これまでに2289万円を支出。残金はトイレや周辺道路の整備などに充てる予定。(中井有人)

参籠殿修復努力たたえたい

大洲市 大崎 義浩(67)

◇春雨の中、修復が修復保存に一決したと成った大洲市の少彦名(すくなひこな)神社。広げ知恵を集め、つい参籠殿(さんろうでん)の落成式には100人を超える市民が集まっていた。

◇同市の榎谷棚田の保存に関わっている私は、この神社の保全活動に引かれ仲間と参加した。昭和9年に地元有志の発起で建設されたという建物は、荒廃して危険なため撤去の話しも出た。が、斜面をせり出した三方懸け造りの建築技術や、伝統と近代を調和させた様式などが価値があると

◇私たちの棚田保全活動もこれに倣って頑張りたい。古き良きものと新しいものを調和させ、地域づくりに生かしていこうという思いを持つ人々が大洲の心通じ合うものを感じた。一日だった。

という専門家の意見で、(無職)

戦時下の姉たち

2月例会でHさんが、名古屋市に住んでいたお母さまが、小学校2年生の時に始まった日中戦争から太平洋戦争が終戦となるまでの8年間の体験談を、毎年母校で講演をしているという内容のレジュメを読んでくださった。

私の姉（昭和3年2月生まれ）と同年代、しかもその姉から名古屋へ学徒動員で行っていたという話を聞かされていた。詳しく知りたいと電話した。87歳の姉は当時の記憶をよどみなく話してくれた。当時姉は愛媛師範学校生。昭和20年2月に松山から名古屋へ。寄宿生活をしながら学徒生は三菱の工場で飛行機の部品ジュラルミンをたたいていた。姉は前年の10月に盲腸の手術をしたため事務の仕事をしていたという。数か所に別れていた工場や寮、度々移動があった。名古屋の空襲にも何度も遭い、B29の爆弾投下時の光と音とは忘れられず、今でも花火はきらいだという。

「その当時の事を書いた本があるから送るね」と。しばらくして、田名後敬著「若き日の思い出」が届いた。著者は、大正5年生まれ、現在の今治市岩城島出身、名古屋に動員された愛媛師範女子部の監督教官・寮監として生徒と生活を共にした昭和20年4月10日から終戦を経た8月18日宇高連絡船に乗るまでの記録が「爆撃の下で」の項で、日記として記されていた。

それによると、名古屋に赴く時、停車した各駅には待ち構えていた親から物品を託され大荷物で身動きができなかった話。挺身学徒たちは堂々と行進歌を歌いながら職場に行く途中や仕事中にもB29の爆撃に遭い、防空壕へ集団退避、解除、仕事の繰り返し。途中4月下旬には10日ほど全員が帰松。此の時は切符乞食と言われるくらい乗車券の確保に困難を極めたそうだ。5月14日朝、400機余りによるB29の名古屋大空襲。さらに3日後に爆弾・焼夷弾の落下・炸裂音・照明弾の投下、凄絶さを通り越し、筆舌につくせないほどの打撃を受けたが、学徒たちはきびきびと動き負傷したものはいなかったそうだ。

そんな中、松山・今治の空襲もあり、両親・親戚のことが心配で、どうにもならない気持ちを抱えながらも、朝礼・体操・元気のよい号令・歌・毎夜の点呼等で夫々が自分自身を鼓舞し任務に励んだ。

そして広島・長崎への原子爆弾投下。昭和20年8月15日、いよいよ戒厳令がしかれ一億総突破せよ、とのことでもあるのかと教官たちと話し合い学徒たち共々緊張しきっていた。陛下自らの玉音らしいと聞き『……いよいよ大号令が下るのだ……わくわくする血肉をおし静めつつ、体中をふき清め、下着からみな新しいものに替えてまつ』……ところが終戦の詔勅。……涙ぼうだとして両頬につたわり落つ。何

の涙か、わからない。ただ、とめどなく流れる』と……貧血で倒れる者、40度ほどの高熱にうなされる者、悲憤の涙、涙の学徒たち、その中で、『私が悪かった。私が不忠者であった。力一杯つとめなかった私が悪かったのです。口先ばかりで仕事をしてきた。相すまなく、悔恨と懺悔の涙が落ちる』ともだえ苦しんでいた著者。

……8月18日、動員された学徒たちは、心ばかりのジュラルミンの台所品を記念に貰い受け、追われる虎豹のごとく名古屋（大高）を去った。~~~~とあった。

もう一人の姉（昭和4年12月生まれ）

昭和20年は西條高校の3年生。周囲全てが戦時色一色、学生も勤労働員され、学校工場といって、教室を工場にし、動力ミシン・手動ミシン・多くの布・アイロン等を運び込み、終日軍服を縫う。また、校舎を守るために、バケツリレーで焼夷弾を消す訓練、防空壕への避難訓練、手旗信号の練習に明け暮れた。20年になると、新居浜・西条上空にB29の編隊が現れ機銃掃射を受けた。

そして、昭和6年5月生まれの姉

出兵した兄や姉の居ない留守中、家族の働き手として除草・草刈の農作業の手伝い。各家庭から、ムシロ・ほし草・イナゴまで供出させられた。学校でも増産教育が勧められ、飛行場の滑走路作り、富士紡の塩田作業など毎日勤労奉仕、学校の授業は午前中の3時間だけだったが寸暇を惜しんでしっかり勉強もした。白いものは標的になりやすいと、家々の壁に色を付け、児童の白いシャツ等も学校で染色することになり、小使室の大釜で、全校児童のシャツを染めた。近くのお寺に疎開してきた都会の生徒の世話も進んでした。自分は軍国少女だった。使命感を持ち先生の言うとおりの模範生だった。日本は勝つと信じ、何の不満も不自由も感じず仕事をこなしていた。

その詳細は、小さい時から綴っている日記帳に克明に記されている。

戦争を抜きにしては語れない姉たちの青春時代、それらを読み、聞き、当時の写真を見ると、私自身が生まれ育った場所での姉たちの動きが目に浮かび、騒音までもが聞こえてくるような気がする。70年経た今とは何という違いか。

終戦後の昭和21年5月、2番目の姉は愛媛師範本科生、3番目の姉は愛媛師範予科生として入学、卒業後は3人とも教職につき新生日本の後輩の教育にかかわった。戦争体験をどのように伝えたのだろうか。今でも揃って元気。集まると話は尽きないようだ。そして異口同音、「あのような体験は誰にもさせたくない」と。 (S. K)

戦争と五人の兄たち

第二次世界大戦が終わって70年がたち、戦争を知る人が少なくなりました。この間、朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争が起こり、20世紀は戦争の世紀と言われますが、幸い日本が直接的に戦争に参加しなかったのは、平和憲法のおかげだと思います。しかし今、日本は戦争のできる国へ向かおうとしています。「歴史を忘れるものは、歴史を繰り返す」という言葉があります。痛ましく恐ろしい記憶は次第に風化しつつある中、戦争体験のある年代の者は、私を含めて戦争を語り継がなければならないと思います。

私には五人の兄がいますが、三人が戦争に行きました。

長兄は満州から戦地に行き捕虜になり、シベリアで寒さ（零下40度）と飢えの中で過酷な労働を強いられ体を壊しましたが復員しました。死に至った人は55,000人だったそうです。収容所で与えられる食物は少なく、毎日配給の黒パンとコウリヤンか、豆入りの水のようなおかゆが与えられるだけで、宗教画にみる地獄の人間のような体になったそうです。ソ連兵の目をかすめて、凍った馬糞をポケットにしおぼせて持ち帰り、シベリア特有の粉雪を飯盒に入れ、ペチカで溶かし、かきまぜると底に不消化の大豆の粒がわずかに残る。それを丁寧に宝物のように水で洗って飯盒の蓋で煎って食べるありさまだったそうです。生命の極限にさらされながら、ただひたすら帰国を念願して生きるための必死の闘いにいどんだのです。帰国後、大手術で九死に一生を得ましたが、医師から両親に「長生きはできないでしょう」と言われたが30代から70代まで町政に関わることができました。「死を何とも思わない教育ほど恐ろしいものはない」は、兄の言です。

次兄の出征時は、近所の人が集まり駅まで送りました。階段の上に立って「行って参ります」と挨拶する兄を、日の丸の旗をふって万歳で送ったのです。終戦になり帰って来る途中、荷物を盗られてしょんぼり我家に着いた兄を、父は「命があったのだから何を盗られてもよい。よく帰って来た」と言ったそうです。帰国後、洗礼を受けクリスチャンになった兄は、子供を集めて日曜学校を開き、讃美歌を歌ったり、お話をしたりしていました。クリスマスには内子の教会へ行き、お祈りして、子供劇やカードをもらって帰った記憶があります。「世界はひとつ」は、次兄の言です。

三番目の兄は、神戸高等商船学校の時に学徒動員され、横須賀で体当たりの

特攻訓練を受けていましたが、終戦で命拾いしたようです。20歳前後の青年が片道だけのガソリンで、二度と帰れぬ旅に飛び立って行ったのです。後日あの時は恐かったとポツリと言ったそうです。

四番目の兄は商船学校に行っていましたが、終戦前から食糧難で寮の食事は乏しく、何時もお腹をへらして、白いご飯に焼きなすの上に醤油をかけて、腹いっぱい食べたいと思ったそうです。育ち盛りに米粒を探さねばならないような雑炊が日常で、訓練にも声だけ出して力が出なかったと言います。

五番目の兄は、長兄が復員するまで、柴田家の田畑を農地改革から守るため、夜間の高校に転入して父を助けました。昼は日用人さん達の先に立って働き、夜は隣町の高校まで自転車です。ある時「荷物を背に負い本を読んでいた二宮金次郎みたいな人は元気かい」とおばあさんに聞かれたことがあります。本当にその通りの姿が目に見えます。

私の戦争体験は、飛行機音が近づき裏山に爆弾が落ち、分家の屋根を貫通して大石が囲炉裡にどかんと座ったこと、母が遊びに行っていた私を裸足で迎えて来た事、家がぐらぐら揺れて怖かったことです。

まだ、夫を満州に残して一足先に引き揚げて来た姉の苦悩や、リュックサック1つで朝鮮から帰って来たいとこ達のことがあります。次の機会にします。

出兵する者も国内に暮らす者も引き揚げ者も、大変な思いをしたのです。何の罪もない憎しみもない人々が殺し合う戦争だけはしてはいけないのです。戦後生まれが8割となり、社会から戦争の実感が失われつつある今だからこそ、日本が平和を誓う原点となった戦争の体験をたどり、二度と戦場へ夫や子供を送ってはならないのです。

さて、太平洋戦争で米軍に撃沈された戦艦武蔵が、フィリピンの水深約千メートルの海底で見つかりました。九死に一生を得た元乗組員（94才と93才）の2人は、戦後70年の節目に姿を見せたことに、「武蔵が何か語り掛けるものがあったのではないか。乗組員の魂が思い出してほしいと呼び掛けているのだろう。感無量だ」と語っています。どんな戦争にも正義はない。

私達は過去と同じ過ちを犯してはならないということを、次世代に伝える責務があります。

H27.3.5 (S. M)

息子の結婚

30 過ぎてもなかなか結婚しなかった長男が 34 歳の今年やっと結婚することになった。ずっと気をもんでいた母親としてはうれしいかぎりである。

昨年 12 月 6 日夫がインドネシア出張で成田に一泊することになったので、会えないかと息子に連絡したところ、息子から会ってもらいたい人がいるということで、私も急きょ時間をやりくりして格安航空ジェットスターで成田に出向いた。そして晩御飯を 4 人でいただきながら話しをすることができた。笑顔の素敵な感じのいいお嬢さんだな、うまく行ったらいいなと心で思いながら、その時はまだ結婚という話もなく別れたのである。

年明けて、1 月 12 日息子から電話があり、彼女に結婚を申し込んだら OK してもらえたということだった。とてもうれしそうな声だった。決まるときはバタバタと決まるものだと思った。

その後、息子は彼女のご両親に結婚のお願いに伺い、その場で許してもらえたとのことだった。親としてはホッとしたというのが正直な気持ちだった。

ただ、本人以外全く何も知らないということで多少の不安はあった。早くあちらのご両親とお会いする機会を持ちたいと思った。息子たちもそのように考え、あちらのご両親もそのように感じられたようで、お互い家族書・親族書を準備することになった。どの範囲で書いたものを交換するかについては息子を介してあちらの情報も聞きながら、同じような範囲でこちら側も準備することにした。いざ準備するとなると、本人の従弟たちの年齢、勤め先など正確に把握していないことが結構あって、問い合わせるなどの手間もかかったが、とりあえず準備した。

2 月 14 日息子と彼女があちらのご両親と我々を招待してくれて、両家初顔合わせとなった。昼 12 時から成田空港近くのホテルで息子が、事前に送ってくれた式次第に従って司会進行を務め、二人でとても心に残るいい会を催してくれた。

まず全員による記念撮影、二人の開始の挨拶および婚約報告、両親紹介、両親より一言、婚約指輪披露、あらかじめ本人欄は書いてある婚姻届証人欄に両方の父親が署名捺印し、一つ一つを楽しみながら進んで行った。ここで、指名による夫の音頭で乾杯、フルコースのお食事が始まった。両家準備した家族、親族紹介書を交換し、フリートークの時間となった。あちらのご両親もとても気さくで話しやすい方で、2 時間以上の会の間本当に話題が尽きることなく和やかな雰囲気の中親睦を深めることができた。最後にお父様の締めの挨拶があった。最近では結納などもしない

が、新居準備をする資金も必要だろうとうちからはお祝いとして少しまとまった祝い金を二人に渡した。

その後、会場を同じホテル内のあらかじめ予約してあったカフェレストランに移し、またさらにお酒やコーヒーをいただいた。夫が、17 時頃のジェットスターで松山にどうしても戻らなければならなかったのが、夫のみ途中で失礼した。

さらに、その日は一泊することになっていた私のホテルに二人とあちらのご両親が来てくださったので、夜までホテルのレストランで、またお酒を飲み軽いお食事をしながら、ざっくばらんにお互いいろいろなお話をすることができた。うちは離れているので、私はこの際あれもこれも話さなければと思いつくままお話しし、今後のこと新居のことなども話しあった。3月10日には社宅に入れるとのこと、社宅の間取り図も見せてもらい4LDKの恵まれた広さと間取りに驚くともに本当に幸せなことだと思った。10年間は安い家賃で住まわせてもらえるという。その間に子育て、貯蓄をしっかりと、自分たちの住まいを準備しなさいということなのだろう。福利厚生もしっかりした会社に勤めさせてもらっているのだと改めて感謝した。婚姻届は3月19日出すとのこと、彼女は3月末で一旦今の会社（土日が基本休みではない）を退職し、生活が軌道に乗ったら、また新しい仕事を探すという。

話の中で特にうれしかったのは二人がうちに眠っている新品の食器類を使ってくれると言ってくれたことだ。よく最近の若い夫婦は、自分たちの気に入って買ったものしか使わないなどと聞いていたので、話してみたもののどんな反応をするのだろうかと内心不安だったのだ。早速写真にとっているかいらないかの判断を仰ぐことにした。（後日談になるが結果すべてほしいということで本当にうれしかった）

家に帰ってすぐ、お父様からご丁寧なお礼状が写真とともに届いた。走り書きのようなお礼状を書いて出した自分の手紙が恥ずかしかった。お父様のお手紙に対して、私が出した葉書に対して今度はお母さまからまたきれいな文字で、母親らしいお気持ちを素直に書いた手紙が届いた。本当に感動した。お二人が大事に育てたお嬢さんに間違いはないと思った。どんな環境でもやっていけるだろうと息子に関しては変な信頼感を持っているが、恐らく二人で話し合いながら今後の人生を仲良く歩んで行ってくれるのではないか思う。うちは息子二人なので、娘ができて夫も私も本当にうれしい。それが今の率直な気持ちである。私が夫の母からかわいがってもらったように、私もこの娘を愛しんでいきたい。

(T・H)

京のまち歩き

京都は歩くまちと言われる。此方に住んでやがて3年。

先ず驚いたことは、朝勤めに行く道々、本を読みながら歩いている姿。京都は落ち着いた街であり、安心な道路がまだ一部に残っておりひと昔前を思わせた。早朝には、玄関先を丁寧に掃き清め、町家の古い格子を拭く男達の姿がある。場所にもよるが、ゴミ一つないきれいな通り、澄み切った流れを保つ細い川などを見ると、さすが観光都市をうたう京都だと頷く。住む人々の日々の暮らしと心が伝わってくる。何と言ってもどこを歩いても、石碑・標札等の多いこと！ 歴史上の人物の名・業績が。時として暗い事件も記されている。何十年京都に住もうとも未だ知らぬことが沢山あると聞く。

こと平安京に関しては数多である。此所がその西限であったとか。大極殿の跡、二官八省〇〇天皇・上皇の事蹟が記され、道長が紫式部がと、千二百年の歴史は長い。となると、秀吉がどうしたのとかは、ずっと最近のこのように思える。京都には戦災・空襲が無かったというのは、先の大戦下のことで(実は小規模ながら点々と空襲はあった)京都人にとっては戦禍というのは、応仁の乱(1466~77年)の大火災をさすものらしい。実に長い歴史の中で、幾度火災・焼失・再建が繰り返されてきたことか。最近大修理のなった宇治の平等院然り。金閣寺の炎上は記憶に新しい。

パリはこのノートルダム寺院の正面を中心として、何キロにも亘って地震がないのである。その多くが石造りであるため火災も少ない。羨望の他はない。

京都は社寺の夥しいこと。寺町界限に限ったことではない。建造物文化財の保護には並ならぬものがある。よくそのポスターを見る。民家の前には各戸に赤い消火バケツが置かれている。

話をお散歩に戻そう。ご近所か何か女達の立ち話。その雰囲気はなごやかで静かである。一度も大声や諍いや口論など激しい言葉は聞かれない。それも外からの観光客への平生の心づかいであり、最上のおもてなしであろう。道を問えば、やさしく応じ、忙しさ煩わしさを決してあらわにしない。街と人が一つになっている。困っていると見るや、親切に声を掛けて何かお役に立ちたいと身に付いているのが、この都の人なのである。多くの学生達は、この地を去る。「さようなら京都」と。京都には名だたる坂はない。その市中が船岡山を頂点にゆっくりと勾配している。よく注意していないと、上りか下りかわからない所もある。何と言っても自転車やバイクが多い。女性達は多く電動式の自転車にしている。緩やかながら長い坂道はしんどいのである。夫は仕事柄すぐ何と排水のよい街だと。地形からして自らそう

なっているのである。道路が長い時間浸水しているということはない。三方を青龍が静かに取り巻くが如く、穏やかな山並みに囲まれた盆地。営々と続いた幸なる地に、伝統文化・芸術・職・技等々が生き続けている。靴の修理屋・紙屋・古書店・文具に結納の幟、染織着物、カフェ、京都は歩いて知るまちである。(M・D)

やみさうに始まる春の

雪にはなほ降りやまずる何のたよりぞ

暦より春は遅くると

思ふうち梅の便りのひきり続ける

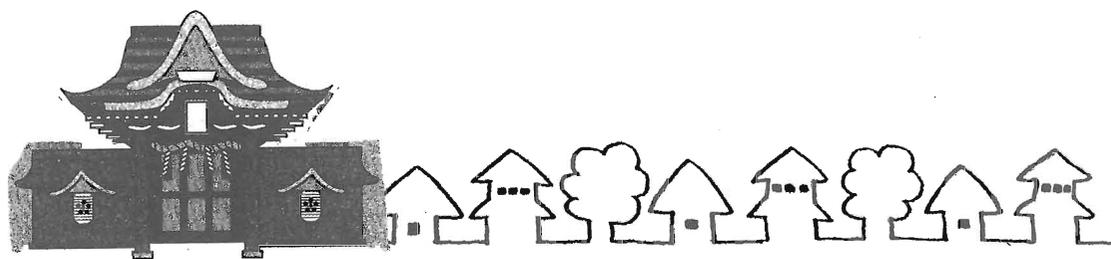
筋肉の衰へ説かれ

運動のすすめ聞きつゝ、二十指動かす

幾十年こりに凝りたる

わが肩はつひに頭が瓦礫化の音

(M・D)



脳梗塞にびっくり

ある朝、目覚めていつもの様に水を飲もうと水を口に入れると、むせて飲めない。おかしいと思ったが、どうしたんだろう位に思い教会の礼拝日だったので7時に居間に行き、着替えようとするが、左手が動かない。パジャマも脱げない。下着を着ることも出来ない。

これはおかしいと思い、友人に「体調が悪いから休む」と電話すると、「菊池さん言葉がわからない」と言う。息子の家にも電話すると、嫁が「お母さんがおかしい」と夫婦が駆けつけてくれた。友人も妹も来てくれてこれは先ず病院へということになり、「日曜日だから救急病院だ」というと新聞で松山市の平成病院と分かり、息子の車で病院に着くと医師に呼ばれ、診察室に入るなり「これは脳梗塞だMRを」と言われ30分の検査の結果、右脳が白くなり、左半身麻痺が起きていると診断があり入院となった。直ちに、点滴といわれベットでの生活が始まった。

左手が麻痺しているので、右手に点滴されると、動きが半減する。物を取るにも、ラジオのスイッチもトイレに座るにも困る事が多く、両手の有難さがよく分かった。時には点滴が漏れ、やり直しも何度かする度に看護師さんに迷惑をかけた。5日間の点滴が終わった頃には、しゃべれるし、左手も足も動く様になっていたが、それから本格的なリハビリが始まった。

リハビリ師が、足の部、手の部、口の部と一日三回に分けてプログラムを作り練習を重ねる事二週間、一日々々と指先も器用さや力が戻り、足も片足立ちも出来る様になった。一番最後迄残ったのが、口のリハビリであった。口の中に唾液が溜まり、舌が思う様に開かないし閉じない。早口言葉や重ね言葉になると、つまって発音出来ない。それでもリハビリを重ね、頬のマッサージをしてもらい、顔の曲りも大分治ってきた。

15日経った頃に外泊の許可が出て家に帰ると、手伝ってもらいながらも一人暮らしが出来ると思うと、急に帰りたくなり、入院20日間で退院となった。

二、三日は、嫁さんや孫、妹に世話になったが、正月過ぎてから、元の一入暮らしとなった。一番困ったのが、入院の前日迄乗った愛車がなくなった。息子が、車に乗っていて脳梗塞が起きたら、大変な事故になると、どこかへ、移動してしまったのだ。「ありがとう。さようなら」も言わずに別れたのは、「夫に別れた次に悲しい」と言うと、友人は笑うが、45年も、職場へ通い・家族を運び、買物や趣味の会に行きと、私の体の一部になっていたので、ど

こへも行けないと思うと、80歳で免許を返し、少し足を鍛えるのも、これから少しでも長生き出来るかも知れないと思えるようになった。一つの病が、皆に助けられ支えられて生活出来る事が分かって人生勉強だった。

三ヶ月過ぎた今は、電車で松山に出かけることも出来るし、お弁当を届けてもらいながらも炊事場に立つことも出来る様になった。

家族も友達も回復が早かったと驚くが、私は、梗塞の場所が小さかったのと、処置が速かった事、救急病院が脳外科だった事、すべてに恵まれていたと思う。

同じ頃入院した病友さんは、まだリハビリに励んでいる方もいるし、意識も戻らず寝たきりになった方もいる。

すべてに恵まれた私も 80 歳にして、人生は、すべて百点満点で終わる事は出来ない事が分かったし、これからの歩みが、ゆっくりでいいから、自分の事は自分で出来、少しずつ衰えていく体力や知力を、これも人生だと受け入れて生きていこうと思っている。

(S a · K)



さあ、旅に出かけましょう

旅と言いましても、物見遊山ではありません。もう、帰らない死出の一人旅なのです。従って、かなりの覚悟が必要です。帰った人はいないから、詳しいことは不明です。

エンディングノートは完成しましたか。別に完成しなくても途中までで結構です。いつわりでも許されます。

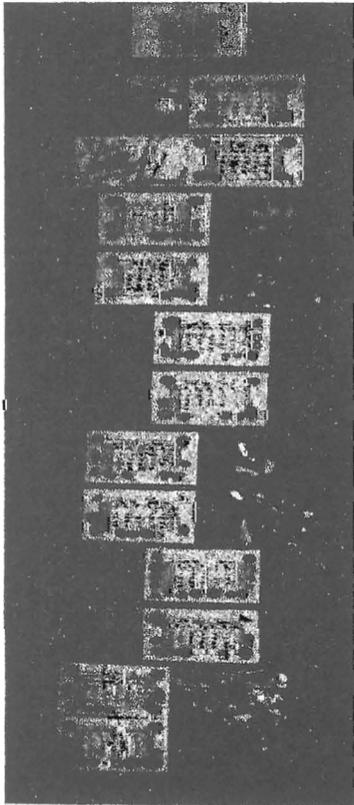
最後の食事は何を食べますか。私は、食べません。最後の飲み物はウイスキーの水割りにしたいと考えます。

読書は、最後の一冊を選びます。難解なものやお笑い系は遠慮しましょう。今、私の頭に浮かぶ数冊の中で、一番感動した読み物は「こんぎつね」です。この教材を教える際に涙で教科書がぼやけてしまったのです。

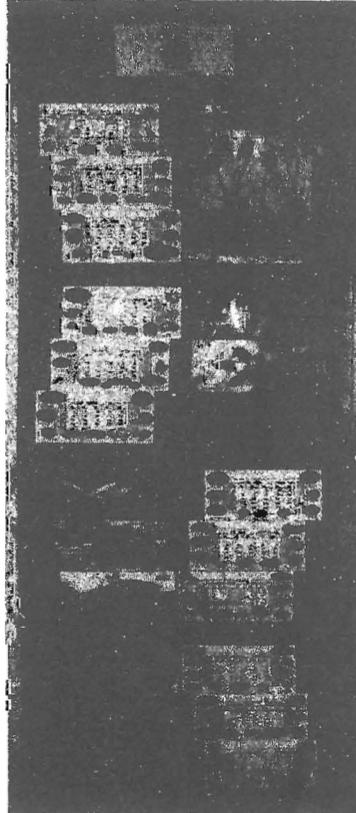
「いい人生だった」と、感謝の気持ちで夫の所に行きます。これで旅は終わりです。

(H・T)

2014年



2015年



会員のK・Oさんが
自宅周辺の
鳥・蝶・トンボや
草花を撮り
カレンダーにして
送ってくれます。
いただいた側は
条福用の台紙に
貼り付け
インテリアとして
楽しんでいます。

短歌五首

* 節分もふた役こなし

爺と婆数も膨らみ乗も差も

* 野菜食ひ満腹になり

声高に食った食ったとヒヨドリの声

* 虫たらは気温任せ

春うらら天道が遠う日当たりの石

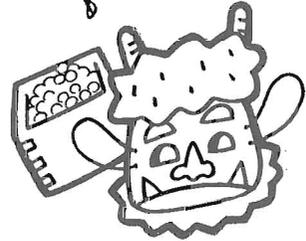
* 天道がトットトットと

枯れ草の先まで詰めて鞘開けて飛ぶ

* 春わいた陽気に出て

紅蛭蜜源探すかたばみの花

(A・N)



前号 (88号) に間違いがありました。訂正をお願いします。

7P ユニセフ ⇒ ユネスコ

20P 忘年会 ⇒ 新年会

5P 絵・写真・情報は「石鎚ふれあいの里」パンフレットより
と記入してください。

雑 感

あつという間に3月も後半です。

1月往ぬ、2月逃げる、3月去る。昔の人の言うとおりで。

おかしな天気が続いています。寒暖の変化が大きく雨の多い3月です。春本番かと思うと、真冬並みの寒さ。一夜明けると初夏のような陽気。驚いてばかりの毎日です。

それでも川向こうの山は例年通り一刷毛二刷毛薄紅を注し始め、山桜が咲き始めたようです。ウグイスの歌も日毎に上手になり、空高くヒバリが長く囀っています。

土手では菜の花、ハマダイコンが咲き、シロチョウ、キチョウ、タテハモドキ、ムラサキシジミ、ルリシジミ、キタテハなど蝶の種類も増えました。

我が家の小さな池には、最初に10尾入れたメダカはどんどん増え、生まれた直後は糸くずのようですが、あつという間に吃驚する位に大きくなります。

メダカしか入れなかった池には様々な生きものがやって来るようになりました。

次々にカエルが卵を産み付け、透明なゼリー状に包まれた黒ゴマの様な卵が勾玉の様な形になると、ゼリー状のものは一つ一つの個体を包む薄い球になり、その内小さなオタマジャクシが元気に泳ぎ出てきます。沢山の大小様々なオタマジャクシが仲良く泳ぎ回っています。

アメンボやゲンゴロウ、ミズスマシも例年より多い様です。

小さな池には少々過密状態では？と心配しながらも、ホテルにも来てほしい、と夢見ています。

池の周りはムラサキサギゴケの可憐な花が次々に咲きそろい、庭はホトケノザの赤紫に始まり、様々なハコベ、ミミナグサ、タネツケバナ、ノミノフスマ、クサイチゴなどの白い花が増え、足許のそこそこにネジバナやニワセキショウが発芽しています。

私の大好きなツメクサもあちこちで咲き始めています。ノハラツメクサなのかオオツメクサなのかは種の突起の有無でわかるということなので、虫眼鏡片手に探してみましたが、未だ種は付いていませんでした。我が家のものは草丈がどれも10cm程度なので、ノハラツメクサなのかもしれません。種が出来るのを楽しみしている所です。金魚藻のような葉に5mm位の小さな白い花を付け、写真でしか見たことの無い、水の中で揺らぐミシマバイカモを想像させてくれます。シロツメクサやコメツブツメクサは“詰草”でマメ科、オオツメクサ、ノハラツメクサは“爪草”でナデシコ科、ミシマバイカモはキンポウゲ科だと、つい最近知りました。

カラスノエンドウ、カスマグサ、スズメノエンドウの3種類のマメ科の花も咲き揃いました。

スズメのカタバiraの花もじっくり見ると可憐で存在感があることを今年初めて知りました。

なかなかお目に掛かれなくて気を揉んだスマイレも長葉の濃い紫、丸葉の薄紫と次々に咲き始めています。ノジスマイレは葉の裏に毛が有る、タチツボスマイレは托葉が細く切れ込んでいる、ナガバタチツボスマイレは葉脈が赤い、とのことですが、どれも当てはまりません。スマイレはスマイレ、と諦めている所です。

ウメ、スイセン、アンズ、ボケ、寒アヤメ、スモモ、モモ、ヒュウガミズキも開花し、ニワウメの蕾も色づき、サクラの芽も膨らみ始めました。

近所ではロウバイ、ウメに続き、様々なツバキ、オウバイ、ハクモクレン、オウトウ、ボケ、ハナモモが咲き競っていますが、近所で一番大きく、青空に舞う蝶の様な沢山の白い花のコブシが切られて無くなったのはとても残念です。県道沿いのお宅の庭先ではオキナグサが沢山の蕾を付け、法面ではノビルが細い葉を風にそよがせています。

裏の木立ではアケビが開花し、ナワシログミが硬そうな実を付け、葉を落としていた様々な木々が芽吹き始めました。下草の中でムラサキケマンが背筋を伸ばして咲いています。

裸木の枝では沢山やって来るメジロ、イカル、カワラヒワ、ヤマガラが見えやすく、それぞれの美しい囀りを堪能することが出来ました。特にカワラヒワは群れでやって来て和製カナリアと呼ばれる美しい歌声を披露してくれています。それに引きかえ、モズ、ジョウビタキは例年より少なく、昨年多かったシメには逢うことが出来ませんでした。シジウカラにもたまにしか逢っていません。

水路の傍では、誇らしげに咲き誇る菜の花に蝶が群れています。地面を這うようにキュウリグサやマツバゼリがひっそりと咲いています。一見、いつもの春と同じような風情を見せてくれていますが、昨春の水路の補修工事で大きなクヌギは伐採され、センニンソウやピンクの花を咲かせていたイタドリの大株も無くなり、U字溝が埋め込まれた水路では、去年の夏ホテルを見ることは出来ませんでした。

人とも、自然とも、出逢いは一期一会だと痛感しています。空の色も、雲も、山を這う霧も、風も同じものとは二度と出逢えません。だからこそ、今有る自然を大切にしなければ、と強く思います。総ての自然に支えられての私達です。埋め立てられる沖縄の海や陸自配備予定の奄美を思うと胸が痛くなります。どちらも貴重な自然の宝庫です。

せめて、反対意見の人を門前払いするのではなく、きちんと話し合っただけで欲しいものだと思います。権力を持った人間が話し合いにも応じない姿は子供たちの目にどう映るのでしょうか。

政治家の姿を見ているのは大人だけではありません。

このところ、またもや“政治とカネ”の問題で委員会が紛糾しています。私のような年寄りには政治家にカネの問題は付き物だと諦め半分で思っただけですが、文部科学大臣にだけは無縁のものであって欲しかったと怒りすら覚えます。

3月11日、あの震災から4年経ちました。

まだまだ復興には程遠い状態で23万人近くの方達が未だに避難生活を余儀なくされています。

報道での「帰らないと決めた人」という表現が気に掛かります。「帰らない」のではなく「帰れない」のです。その理由は様々ですが、4年という年月は当事者にとっては新しい場所に根を下ろすに十分な長さです。幼児だった子どもは児童になり、児童は生徒になっています。何時になるか判らない高台移転や除染を待つより、現在の場所で頑張るより他ない、との決心に違いありません。

自然災害に加えて、原発事故のあった福島の方達は尚更です。

原発事故では早い内からメルトダウン、メルトスルーが懸念されていました。渋々70日後にメルトダウンは認めましたが、メルトスルーは認めていませんでした。しかし、3月19日NHKの報道によると、事故を起こした原発を特殊な装置で透視した所、原子炉内には核燃料が見当たらないことが解り、今まで推測されてきた“融けた核燃料が原子炉の底を突き破り格納容器に融け落ちている（メルトスルー）ことの裏付け”になるということです。汚染水処理すらトラブルばかりで遅々として前に進めない事故処理は今後どうなるのでしょうか。何年かたった後、“メルトアウトしていません”ということにならないことを祈るばかりです。

全国にある老朽化した原発の内、出力が小さく安全基準を満たす工事をして延長を申請するのは割に合わない5基の廃炉が決まりました。

運転を続けている間中、高レベルの核廃棄物を産み出し続ける原発、一度事故を起こすと人間の手には負えない原発。廃炉は大賛成ですが、今後、廃炉に伴って出てくる様々なレベルの核廃棄物の事を考えると暗澹たる気持ちになります。処分に関して何も決まっていなくてよい状況です。先日、原発関連の分野で学ぶ学生達の意見を聞く特集番組を見る機会がありました。多くの学生が、廃炉という言葉に後ろ向きの印象を持

っていることを知りました。ネガティブな研究には興味がない、という学生が少なくなかったのです。今、現に存在する負の遺産を安全に処分し、真に明るい未来への道を切り開く最先端の素晴らしい学問、研究である、という想いを共有することの大切さ、大変さを垣間見た想いでした。

しかし、未だに、“安価でクリーンなエネルギーである原発をベースロード電源とし、規制委により安全が確認された原発の再稼働を認める”とする現政権下では無理なことかもしれません。

2015年1月30日衆議院予算委員会において、安倍総理は「集团的自衛権行使容認の閣議決定・原発再稼働ともに先の総選挙で国民の信任を得た」と発言しました。結局、“大義なき解散”と各方面から不思議がられた解散総選挙は勝てる内に勝って、残り2年の任期を4年に伸ばし、私達の国を大きく変えてしまうことに他ならなかったのだと思知らされています。その為、ありとあらゆる判りにくい言葉の変更を駆使しています。例えば、周辺事態→重要影響事態、武器輸出→防衛装備移転などです。

真に積極的平和主義を標榜するならば、加害者を産み出さない社会、世界の構築に腐心して欲しいと願います。世界中、紛争、テロが頻発し日本人も犠牲になりました。国内でも理解できない残酷な事件が多発しています。その原因を専門家は愛情不足、貧困、格差などによる不満だと言います。多分、全てが複合しているのでしょう。誰もが純真無垢な嬰兒としてこの世に送り出されるのです。一人一人の心を歪めることのない、摘み取らない環境整備を望みます。

大五郎と杏は毎日小競り合いを繰り返しながらも仲良く過ごしています。ただ、ここ数日、大五郎が杏に恋心を抱いているのは事実なのですが、生後2か月で我が家にやって来た花冷えの頃、暖かい大五郎の懷に抱えられて眠っていた杏にとって、大五郎は父親であり母親であって恋の対象にはならないようです。暫く、大五郎の悩ましい日々が続きます。こればかりはどうしてやることも出来ず、夫と私も溜息です。

本葉が出始めた頃から暫く、毎日夫がピンセット片手に幼虫や卵を排除して育てたキャベツは完全無農薬ながら、虫食い穴ひとつなく元気に育ち食卓に上っています。

御近所から頂いたツワブキも株が増え、水炊きに天婦羅に、呉から連れてきた蔞の薑や自生の土筆と共に春の香りを満喫しています。土筆は例年通りですが、蔞の薑が今年には豊作で嬉しい限りです。

雨上がり、一気に花が咲き芽吹きが進み、周りが一変しています。催花雨です。(K.O.)

編集後記

昨年から「井戸端だより」の編集は4名で順番に担当することになった。若い人たちが関わってくれることは喜ばしいこと。

今回もメール・ファックス・郵送・手渡し等で9名から原稿が届く。人生を積み重ねたそれぞれの思いが伝わってくる。書くことは難しい。でも時々
の状況や感じたこと等文字で残すことは大切だと思う。

幸い、「井戸端だより」は郷土資料として東温市立図書館のホームページ上でいつでも読むことができる。

ゆとりが出来たとき、それらの記録を楽しみたいと思う。

(S. K)

4月例会のお知らせ

日時：4月1日（水）8時45分 中央公民館集合

場所：久万高原町柳谷 水力発電所見学

くらしの学習会では、随時会員を募集しています。

活動会員 2,000円/年 購読会員 1,000円/年

振込先口座番号（郵便局） くらしの学習会 01610-5-21026

問合せ先 TEL/FAX 089-964-6956

E-mail: kt-hayashi@nifty.com